

それが始まりだった ——自主講座「公害原論」との出会い

家中 茂

1. 東大自主講座

東大本郷の工学部8号館302号室は、ぼくらにとっては自由な空気があふれていた。とくにこれといって自主講座の実行委員会にかかわっていたわけではなかったけれど、そこへ行けば、誰かに会えたし、する仕事も待っていた。お茶の水の駅前で手渡す自主講座の案内チラシを印刷したり、そのための紙の丁あえを覚えたのも302号室だった。戸田幹人君¹⁾や小田輝穂君²⁾という工学部の仲間もいたし、大学論³⁾では立川勝得さんらとよく会った。作業が終われば本郷3丁目のもつ焼き屋や農学部横の南州屋に寄った。遅くなると門が閉まるので、赤門横の柵を越えて帰ったものだ。トライ印刷ショップや白山分室そして春日⁴⁾にも出かけて、そこでは荒川俊児さんや青山正さん、やがて水俣で再会する安川栄さんとも知り合いになった。その頃、月刊『自主講座』の『土の声民の声』への改題があり、事務局では坂口さんや姫野さん、あるいは児玉貫太郎さんにお会いすることが多かったように思う。自転車に乗ってる横山正樹さん⁵⁾を本郷構内でよくみかけた。

こんなふうに自主講座に出入りするようになったのも、宇井さんが駒場で始めた「公害原論」が糸口だ。高校の同級生よりちょっとあとに駒場のキャンパスに通うようになったぼくは、60年代70年代のことが知りたいと思っていたのだが、そのときちょうど、折原浩さん⁶⁾の自主講座「人間社会論」が「再開」した（苅谷剛彦さん⁷⁾が手伝っていた）。それとほぼ前後して、宇井さんが駒場に乗り出して自主講座「公害原論」を始めたのだった。いまのキャンパスマップでいうと14号館あたりの教室だ。そこで三島沼津や水俣の話を聞いた。公害について平均的意見とは、相加平均ではなく相乗平均だなんて話も聞いた。宇井さんが「単身」駒場に乗り込んだのは、40才代だったのだろう。ぼくにとっての宇井さんはずっとそのときの風貌のままだ。演台の上手で黒板を背に語る姿や、

自主講座の終わった後に駒場東大前の駅裏の焼鳥屋で酒を一杯やっていったときの姿が思い浮かぶ。

それが始まりだった。川本輝夫さんの「公訴棄却」判決⁸⁾のあった1977年のことである。

2. 水俣一人芝居

その夏に「水俣実践学校」が開かれることを自主講座で知った。それは生活学校の前身になるもので、1週間ほど水俣病センター相思社⁹⁾に寝泊まりして水俣の現在を学ぶものだった。1973年第1次訴訟判決からしばらくたっていたからだろう、「今、水俣は」とか「水俣病は終わっていない」というフレーズが集会のポスターのコピーとして使われるようになっていた。相思社の柳田耕一さんたちが受け入れで、栗原彬さんや小林茂さん¹⁰⁾、森永都子さん¹¹⁾、中地重晴さん¹²⁾らも参加していた。神田三省堂裏の「兵六」の前を通るときには息を詰めていたのに、芋焼酎がこよなくうまかった。どんぶりで刺身を食べる話を聞いた。水俣病のことは水俣がわからなければわかりません、ときっぱりとした口調で語る石牟礼道子さんに会った。「援農」では坂本登さんのところにお世話になった。慣れぬ手つきで鎌を握る姿をみて、登さんは作業のペースを配慮してくれた。坪谷の江郷下さん¹³⁾の畑に、宮澤信雄さん¹⁴⁾が異動挨拶をしにきていた。

環境庁との交渉や座り込みがあったので、新橋にあった青林舎¹⁴⁾の事務所でひらかれる東京水俣病を告発する会の会合にも、久保田好生さんに誘われて何度か出かけた。そこで、写真家の宮本成美さん¹⁵⁾から、砂田明さん¹⁶⁾の芝居を浅草であるから人手が必要だと声をかけられ、手伝いに入った。時枝俊江さん¹⁷⁾や岡村春彦さん¹⁸⁾らが居並ぶ稽古場で初めて見せていただいたとき、これはほんとうに「芝居」なのだろうかと思った。江津野老という生身の人がそこにいた。しかしながら、最後の場面で江津野老が水俣病裁判提訴の1969年に亡くなっていることを知らされる。つまりは、夢幻を見ていたことになる。手でつかむことのできるようなりアリティのなかに没入して、現実とは異なる時空をくぐり抜けていたのだ。

1980年2月の浅草木馬亭での公演を皮切りに、砂田さんは一人芝居の全国勧進行脚に出た。浅草公演と一緒に手伝った佐藤真君¹⁹⁾や石橋涼子さん²⁰⁾らと東大でも勧進元を結成して公演の準備をしていた。5月、丸木美術館での公演直後、砂田さんは過労で倒れた。声がまったく出なくなり、以後の公演はキャンセルとなった。1週間ほどの面会謝絶のあと、1970年水俣巡礼団²¹⁾の白木喜一郎さんのマンションに呼ばれて、砂田さんと会った。思いの外、芝居が人びとの深いところに届いている、社会の底流でおきている地殻変動とでもいえるものにぶちあたったらしい、そういうお話だった。そして、全国行脚の勧進公演に同行するお誘いを受けた。3年やってみる、といってお請けした。こうして、砂田さん、奥さんのエミ子さんと3人で、「不知火座」の旅が始まった。それは、ものが創り出される瞬間や現場に立ち会うということがどういうことであるのか、表現するという行為の質がどのあたりに発するのか、身をもって覚える機会だった。ぼくが旅に出られないときは、ギターの名手、星埜守之君²²⁾が公演に付き添った。

3. 白保サンゴ礁

砂田さんの水俣一人芝居の旅は、全国の草の根運動のネットワークのまっただ中にあった。1983年の夏には、横山さんや神崎雄二さんを介して、アジアキリスト教協議会の招きでフィリピンでひらかれたアジア民衆演劇のワークショップに参加した。沖縄の白保サンゴ礁の埋め立て反対運動の話が飛び込んできたのは、この年の秋のことである。沖縄での勧進公演でお世話になった前川美智代さんからだった（願をかけて、以後、魚住けいと名乗るようになった）。サンゴ礁を埋め立てて軍事利用もありうる大空港を建設するという計画は、フィリピンで出会い、マルコス退陣の要求を掲げて街頭に出ている人たちの顔とも重なった。そこで、83年の年末から84年の正月にかけて、砂田さんや山田征さん²³⁾らと白保を訪ね、白保の人たちと出会った。生きている海に出会った。79年の新空港建設計画発表以来、孤立無援のなか、白保の人たちが埋め立てを阻止してこられたからこそ、ぼくらがこの海を知ることができた。そのことに感謝すると同時に、まだこの海を知らない人たちにつながなければいけ

ない、そういう責任を受けとった。そしてまた、水俣の杉本栄子さんは身体がじんじんとするときには海につかると聞いていた、その水俣の海と白保の海とが重なった。

この白保サンゴ礁の埋め立てを阻止するために、およそ考えられる限りのすべてのことを実行した。絶えず日本中の目がそこに注がれること、そのためにもサンゴ礁の国際的な調査を入れること、戦後日本の海が埋め立てられていったその無念のもとに蓄積された経験を沖縄に伝えること、なかでも漁業権について徹底的に理解を深めること。

京都にいたアイリーン・スマスさん²⁴⁾がすぐに思いついて、ジャック・イヴ・クストー²⁵⁾に手紙を書いた。クストー協会からリチャード・マーフィさんが派遣されると、その報告書をこんどは国際自然保護連合に送った。漁業権については、自主講座をつうじて知り合っていた熊本一規さん²⁶⁾のところに白保から帰ってすぐに会いに行った。京都の常寂光寺の長尾憲彰さん²⁷⁾と砂田さんが、この闘いには絶対に勝とうと、漁業権裁判提訴と白保サンゴ礁の写真を全面につかた新聞意見広告の経費を出して下さった。このあと、白保漁民の採る天然もしくは全国の有機農産物流通のネットワーク（大地を守る会、ボラン広場など）²⁸⁾にお願いして、長尾さん砂田さんへの返済金をつくるとともに、J.E.N.ペロン（オーストラリア海洋科学研究所）やC.バークランド（グアム大学）ら著名なサンゴ礁学者を招聘する資金をつくった。日本自然保護協会やWWFジャパン²⁹⁾の調査を野池元基さん³⁰⁾が準備し、生態学会や研究者とは京大の加藤真さん³¹⁾がつないでくれた。鈴木マギーさんやリック・デーヴィスさんが資料を英訳してくれて「地球の友」その他の国際的なネットワークに発信した。ジャック・モイヤーさん³²⁾やナナオ・サカキさん³³⁾らも輪に加わった。山田征さんが衆参議員会館に足繁く通い、美濃部亮吉さん、岩垂寿喜男さん、菅直人さんらとコンタクトをとった。当時、有楽町にあった東京都庁に田尻宗昭さんにも会いに行った。

こうした白保サンゴ礁をめぐる運動は、サンゴ礁の海を美しいと感じる人びとの心を信じ、そのことが人びとを結びつけ、力を生み出した運動だった。至るところで人びとが自分でできることに感じたままに取り組み、それぞれの職務のなかにあっても知恵を絞った。1986年にチエル

ノブイリで原発の事故があり、生命について女たちの運動が立ち上がりつていったことも時代の精神として通底していただろう。誰が指示するのでもなく、組織化を狙うのではなく、個々人の発心に根ざした運動だった。白保の人たちに思いとしていかに寄り添うかを大切にし、石垣・八重山の将来を選び取ろうとする島の人びとの意思の前には一歩退いて、その選択が賢明であることを願って情報を提供することに専心し、運動が傲慢になることを自戒した。

4. 白保にて

1988年から1年のつもりで、結局2年となったが、海を眺めながらお年寄りのお顔をみて暮らしたいと思って、家族で石垣島、白保の隣部落の宮良に家を借りた。砂田さんの芝居「海よ母よ子どもよ／現代夢幻能『天の魚』」の全国行脚に同行し、さらに白保サンゴ礁との出会いがあってから、自主講座との行き来は遠くなつていったが、宇井さんが沖縄大学に着任したという話は伝え聞いた。

島に暮らすことは、東京生まれ東京育ちのぼくにとって得難い経験だった。白保の漁民（海人）^{ウミンチュー}とのつきあいがあったから、月の満ち欠け、潮の満ち引きが生活のリズムを刻んだ。サンゴ礁調査の手伝いなどもあったし、多いときには2日に1回ほどのペースで白保の海で泳いだ。目に入るものの、草木も魚も風景もすべて新しい経験だった。白保部落の寄り合いにも出させてもらった。公民館³⁴⁾の集会や新石垣空港建設計画阻止委員会の会合などである。そこで、東京や京都にいたままであれば、いくら足繁く通ったとしても知ることができずにいた、むら（村落）というものに出会った。

寄り合いのようすは、宮本常一が『忘れられた日本人』（1960）のなかで描く「対馬にて」のように濃厚なものであった。あとで読むことになるのだが、きだみのるの『気違い部落周游紀行』（1948）にててくるとそっくりな寄り合いでのやりとりがあった。誰もが相手の話すことがわかっており、さらにその親や祖先のことも知っており、そのなかで最終的に話の落としどころを決めていく。阻止委員長の迎里清さんはそうした部落の意識を十全に心得ており、部落の意思を迎里さんが体現し

ているとでもいえる瞬間にいくども立ち会った。

迎里さんはよく次のように語った。いま頭上で爆弾が落とされるというそのときに、人は黙ってそれに甘んじはしない。藁にもすがる思いで懸命に、全身全霊でいまどうしたらよいかと考える。農作業をしていても、何をしていても無言のうちに考えて、危機を脱出しようとする。「公人」としてどう発言すべきか、行動すべきか、自分を頭の斜め後方から見ている自分がいる。人間というのは厄介なものだ。自分のことでもそうさ。

こういう迎里さんが、公民館（村の集会所）で、お年寄りたちや集まってきた人たちの前で話をするときに、その人たちが無言のうちに対話しているのが伝わってくる。これまで海とかかわってきた自分の人生を振り返り、迎里さんの言葉に重ねあわせて反芻している。その様を後方から見ていると、砂田さんの一人芝居『天の魚』をみているうちにだんだんと大きな塊が演劇空間として生成されていくのとまったく同じように、白保公民館のなかに、ごつごつとして手でつかめそうな気の塊がもりあがってくるのが感じられた。

1988年に環境アセスメントに対する住民意見書が提出された。そのときの迎里さんの意見書を読んで宇井さんが地元紙の論壇に、これほどにまで自分の土地との結びつきを深く語った言葉をかつて読んだことはない、という趣旨の文章を寄せている³⁵⁾。それは白保の陸と海とが水系をつうじて一体となって成り立っていることを語ったもので、実際に迎里さんと一緒に轟川からカラ岳を歩きながらぼくが書き留めたものだった。宇井さんの見る目に誤りはなく、土地の人びとの目線をとらえていた。

宇井さんが沖縄に来たことは、沖縄で環境運動をしていた人たちにとっては目を啓かれる思いだったに違いない。全国的な動向や国際的なネットワークについて住民の側に立って伝える人はそれまでいなかったのではないだろうか。沖縄国際大学に玉野井芳郎さんがかつていらしたが、現場を歩いてきたという点ではまったく次元が異なっている。自主講座を主宰し、人びとの自発的な参加を結集したような運動の経験は、他の誰とも比べることができなかつたろう。宇井さんは義侠心が強いともいえる人だから、人に担がれれば盾にもなるうという気持ちもあったかも

しれない。自主講座のときもそうであったように、そういうことについてあまり意に介さないという生き方の態度が宇井さんにはあったようだ。

那覇の運動団体が中心になって提訴した、白保サンゴ礁の埋立工事差止裁判（1988年提訴）というのがあった。それは宇井さん一流のやり方で、新石垣空港建設懇話会の「御用学者」を法廷の場に引きずり出して追求し、隠蔽されている事実、情報を公開させるという戦術だった。ところが、白保漁民、住民が1984年から準備してきた漁業権にもとづく妨害排除請求を提訴しようとしたとき、この工事差止裁判がすでに提訴されているから、同じ裁判はできないという議論になった（二重起訴問題）。ここで問われたのは、問題の当事者とは誰なのか、あるいは、他者の多層的なかかわりをいかに認めるのか、という環境社会学の重要なテーマと結びつくようなことであったし、また、漁業権や入会権などの「総有の権利」をどうとらえるかという問題でもあった。1980年代当時はまだ、漁業権が前近代的な封建遺制であり、漁民は海を売ってその代価として漁業補償金を受けとるといった誤った見方が残っていた。工事差止裁判でとりあげた「イノ一権」のアイデアのもととなったコモンズ論を書いた多辺田政弘さんにもしても漁業権について理解が十分ではなく、漁業＝商品経済＝非自給的非自立的経済＝コモンズという図式でとらえていたようだ（多辺田 1990）。このときの経験をふまえて、熊本一規さんが『持続的開発と生命系』（1995）を書いている。

白保の人たちは、私的権利（排他的独占的所有）から排除されている自分たちと海とのかかわりを表現するのに、漁業補償金不受理の闘いのなかから、「金はいらない、海がいる」という言葉をうみだした（この経緯については、『地域の自立 シマの力』下巻（新崎ほか編 2006）序章を参照していただきたい）。白保サンゴ礁をめぐっては、漁業補償金の漁協組合員への配分も済み、環境アセスメント意見書の縦覧までいったが、住民の反対にあって、事業主体（沖縄県）が公有水面埋立免許申請をすることができず、新空港建設という大規模公共事業における埋立計画が白紙撤回された希有な事例である（家中 2001）。

5. 生活環境主義

あの白保公民館でみた、手でつかめるほどにはっきりとした気の塊のようなものについてどうしたら表現することができるだろう、白保の人たちの海との結びつきをどのように表現したらよいのだろうか。2年間の島の暮らしから京都に戻り、そのような問いを繰り返しつつ、琵琶湖研究所の嘱託の仕事をしているときに、『水と人の環境史』（鳥越・嘉田編 1984）を出した環境社会学の研究者の仕事に出会った。嘉田由紀子さん³⁶⁾や鳥越皓之さん³⁷⁾たちの研究である。1984年当時、このような仕事がなされていたことについてはまったく知らなかった。ライフヒストリー論についても、なぜいまさら社会学がライフヒストリーを取り上げるのだろうと、石牟礼道子さんの作品や『思想の科学』で紹介されていた「聞き書き」と比べて思いもした。

ところが、鳥越さんの「本源的所有論から環境権へのアプローチ」という論文を読んだとき、そこに、白保で迎里さんや漁民の人たちと徹底して話し合ったことがそっくりそのまま書かれていることに驚いた。感じじるままに考えたことが、論文という形式をもって、現実を把握する道具となっているのだ。アカデミズムの人がなぜこのようになることがわかるのだろう。東大において、自主講座の302号教室だけが自分にとってふつうに呼吸する空間といえた身にとって、それは至極あたりまえの疑問だといえばいえる。その論文の末尾には次のように記されていた。

歴史をふりかえるとき、なぜ平和を希求する農民や漁民が、ときにあのような大きな騒擾をくわだてたりしたのであろうか、という疑問がわく。（中略）人民が本来的にもっている「所有の本源的性格にもとづく権利」が否定されたとき、それに抵抗する以外にいかなる道が残されていようか。近くはたとえば、水俣がそうであった。
(鳥越 1997: 60)

そう、「近くはたとえば、白保がそうであった」のだ。このことに届かない環境運動というものはいったい何なのだろう。白保サンゴ礁をめぐる運動では、実際にいろいろなタイプの人々に会った。おそらくこのよう

なことでもなければ会うこともなかつたような人たちに会う経験を得たし、白保は「聖なる海」として、光も闇も呼び寄せた。水俣もそうなのだ。土本典昭さん³⁸⁾が、水俣に向かいあう者は水俣のヤシリに削られるといった旨のことを言っている。宮本成美さんも、写真家が撮るのは対象と自分との距離（関係）だという。サンゴ礁の保護運動は結構なことだ、しかし、ところであなたの人生にとってサンゴ礁とは、アオサンゴとは、いったい何なのですか。現場にかかわるということは、そういう問いを突きつけられている。それは同時に、「学問における実践とは何か」という問い合わせもある。

石垣に滞在していた1987年から89年の2年のあいだ、水俣では最後のチッソ座り込み³⁹⁾があり、甘夏事件があり、新潟阿賀野川では佐藤真君や小林茂さんが旗野秀人さん⁴⁰⁾と『阿賀に生きる』を撮り、鶴見良行さん⁴¹⁾と中村尚司さん⁴²⁾はアラフラ海を航海していた⁴³⁾。

2年の滞在を終えて京都に戻ると、中村さんの紹介で鶴見さんにお会いした。そして、龍谷大学の大学院のゼミに出入りさせていただくようになった。鳥越さんの関西学院の大学院のゼミにも出入りするようになつた。「自主講座」とくに「大学論」で、これぞと思った人のところへ出向いて学ぶ、という姿勢は身につけていた。中村さん・鶴見さんのゼミ、鳥越さんのゼミでは実に多くのことを学ばせていただいた。学友も得た。関西学院大学大学院に社会人入学をし、「新石垣空港建設計画における地元の同意」（家中 1996）という論文に、白保で見聞きしたことを書き記すことができた。

6. 真南風の設立

白保の運動では、白保漁民の採った天然もずくを食べていただき、美味しかったと払ってもらったものを積み立てて、サンゴ礁保護のさまざまな活動の資金をつくった。運動だからといってカンパニアを募るスタイルを変えたかったからだ。白保サンゴ礁の埋立計画が撤回される頃には、有機農産物流通のネットワークもかなり定着しており、そこで1995年に、「沖縄手ヌ花・食と工芸 真南風」という会社を、魚住けい、夏目ちえさん、ぼくの3人で立ち上げることにした。京都の自宅の一室を

オフィスとした起業である。その後、赤土流出をくい止めるための作物として黒ゴマを普及させたり、黒米や黒糖、生食用パイナップルや完熟かぼちゃなどを扱っている。サンゴ礁保護運動をとおして、島々が健やかであるためには、そこに農業漁業が根づいていかなければならず、個性豊かな島の産物を扱う流通の仕事が重要だと気づいたからである。中村尚司さんの「商業論（商人論）」を理論的な背景とした。このときも中村さんはじめ、常寂光寺の長尾さん、けやき法律事務所の折田康宏さん、法然院の梶田真章さんらにお世話になって出資者となつていただいた。真南風は「民際学」⁴⁴⁾の実践でもあり、その運営と次に述べる地域研究所でのシンポジウムがぼくにとって車の両輪だった。

7. 沖縄大学地域研究所

沖縄のフィールドワークを続けていくなかで、やはり通うのではなくて、集中的に島に住んで調査をしないと十分なことはみえてこないということを感じはじめていた。せいぜい10日前後の滞在になつてしまうのだ。2000年、竹富島の種子取祭を訪れたときに、沖縄大学地域研究所で公募があることを友人が教えてくれた。地域研究所は、新崎盛暉さん⁴⁵⁾が学長のときに、沖縄大学創立30周年を記念して設立し、初代所長が宇井さんだ。自主講座から始まり、ここでまた、宇井さんのつくった「民の学問」を志す研究所の専任所員として務めることになった。このとき、3代目の所長の高良有政さんの下に企画したのが、連続シンポジウム「方法としての沖縄研究」だった。地域研究所所員1名をホストに、その分野でオリジナルな仕事をされている方を2名ゲストに、コメントーターに1名お招きして、2002年から2004年にかけて8回にわたって開催した（その成果は、大江正章さんのコモンズから『地域の自立 シマの力（上・下）』として出版した）。シンポジウムの第1回目は、宇井さんをホストに、原田正純さん⁴⁶⁾、森住明弘さん⁴⁷⁾、そして三輪信哉さん⁴⁸⁾をお招きし、「現場からのとらえ返し——もうひとつの科学技術論」を開催した。宇井さんが立ち見が出るぞ、と言つたとおり、会場は満席だった。

このシンポジウムを準備するにあたつて、宇井さんは、飯島伸子さん⁴⁹⁾が元気でおられたらゲストにぜひ来ていただきたいというお気持ちだ

った。宇井さんは、環境社会学をつくりあげた飯島さんの仕事を高く評価していて、労災・公害年表など、歴史的事実を積み上げ、そこから教訓を引き出すという、地道な仕事が今後ますます重要になるに違いないと指摘する一方、そういう仕事をする人が少なくなっている現状を残念に思われていた。

地域研究所の書庫は、宇井さんが東大工学部302号教室からもってきた資料でいっぱいだった。そのために研究所のスペースが半分以上とられているといつてもよかったです。70年代の住民運動のニュースレターなど、いまでは入手不可能な貴重な資料である。さらに奥の方の書棚をみると、なんと60年代末からの新聞切り抜きがある。自主講座でつくった資料もあるうが、宇井さん自身が切り抜いて綴じたものも多くあるだろう。宇井さんの退職が近づいてきており、ぼくはこの資料をどうするかが気になっていた。研究所の専任所員にも任期があるから、ぼくがここを離れたあとは、この資料は散逸してしまう可能性も否定できない。

そのようなことを考えていたときに、埼玉大学共生社会研究センター⁵⁰⁾の藤林泰さん⁵¹⁾が宇井さんのインタビューをしに現れた。藤林さんは鶴見さんつながりで、共生社会研究センターに、鶴見さんの所蔵書籍、読書カード、フィールドノート、写真を鶴見千代子さんから寄贈してもらって、「鶴見良行文庫」の開設を準備していた。70年代80年代の住民運動を語るうえで欠かせない、住民図書館⁵²⁾の資料も引き取ったという。そこで、思い切って、藤林さんに宇井さんの自主講座時代からの資料について相談してみたところ、喜んで引き受けてくれるという。しかも、未整理のままで送料も負担して。その後、共生社会研究センターでは、宇井さんの資料のデータベース化を進めており、この貴重な財産が活用される道を開いている。

地域研究所の運営では、当時2回目の学長となさっていた新崎盛暉さん（2代目所長）ともホットラインで意思疎通をしていた。小中高校生の環境研究への助成である「ジュニア研究支援」を創設するのに、大石武一さんの白保との縁で柳田耕一さんを介して、「緑の地球防衛基金」が白保サンゴ礁保護のために地域研究所に助成金を配分していたのをつかわせてもらうことにした。「ジュニア研究支援」という命名は桜井国

俊さん⁵³⁾によるもので、中村和雄さん⁵⁴⁾とともにそのアイデアに即賛同してくださった。小中高校生の研究成果発表会は毎回感動をよび、大学教員には自分の足元、すなわち、研究の原点というものを見つめ直させるほどだった。

2005年には、4代目所長比嘉政夫さん⁵⁵⁾の下で、トヨタ財団と共にフォーラム「地域を知る——市民調査の可能性」を開催した。地域研究所には学外の協力者として「特別研究員」という制度がある。この企画を立てたときにトヨタ財団の助成をうけている沖縄を対象とする活動¹¹のうち8までが地域研究所の特別研究員によるものだった。目の前にある山積した課題に対応するに、住民が自らの手でしていくなければならないのが沖縄の現状だ。フォーラムでは、米軍基地の環境汚染、干渉生業、外来動植物、赤土流出、ゴミ問題、琉球史資料、沖縄戦の記録、沖縄の伝統工芸・芸能の継承等々、さまざま課題に取り組んでいるグループ、そして県外からは嘉田由紀子さん、あおぞら財団⁵⁶⁾の上田敏幸さんその他のみなさんと参加していただいて語り合った。そのときのキーワードは「自ら責任がもてる地域をつくるための調査」であり、地域研究所のような場が地域ではたす役割、そこで創り出される知のスタイルについて、ひとつの手がかりを提示した（沖縄大学地域研究所 2005）。

8. 生活者のプラグマティズム

『地域の自立 シマの力』上巻（新崎ほか編 2005）序章のなかで、ぼくは、宇井さんを「プラグマティスト」だと書いた。宇井さんが「理論は行動の選択を誤らない程度にあればよい」と言っているからだ（宇井 2005: 62）。それは自主講座のスタイルでもあった。自主講座に集まつた人びとのことを宇井さんは、議論は下手だが、講座を準備する種々雑多な仕事はおそらくほど手際よくこなすと評している⁵⁷⁾。大学闘争にもみえたような、現実から遊離した議論で消耗することを避け、自主講座では、具体的な作業を進めていくことで現場の要請に応えようとした。あれこれ議論する前に、まずはやってみて、それから考えればよい、まずければやり直せばよいというのが、宇井さんの流儀でもあった（それがいきるには組織が柔軟な構造をしていなければならなかつたろう）。

「理論は行動の選択を誤らない程度にあればよい」とは、実験科学者としての宇井さんの矜持を示すものだったかもしれない。宇井さんは、自分を「実験屋」、つまり、職人としてとらえていた（宇井 2001）。沖縄でも大学を退職するまで、畜産排水処理施設の実験をおこない、あくまで現場の技術者であり続けるのをやめなかった。その一点において、行政や政治のおかしさを批判するのに、視点がぶれることができなかつたといえるし、評論家然とした態度から決別していたといえる。東大自主講座では、実験助手として実験器具を洗う手作業をしているうちに、新しい想を得たり、自分の考え方を検証する手がかりが得られるときがあるという話をよく聞いた。

鶴見俊輔さんが『読んだ本はどこへ行ったか』という本のなかで、プラグマティズムについて次のように語っている。

プラグマティズムの考え方の中心は何かというと「あなたはそう言うけど、どうやってそれを測るの」ということに尽きる。つまり、何を目安にしてものを考えるのか。その時に、彼らが目安にしたのは、自分の身体や身近な生活です。（鶴見 2002: 28）

「目安を立てる」ということがある。今生きている状況の中で、このへんを標準にして考えてみましょうという目安。それがプラグマティズムだと私は思っている。そこには、状況の中での個人の判断があり、ある種の倫理、価値判断が前提としてある。（鶴見 2002: 31）

そして、日本のプラグマティストの系譜として、高野長英、柳田国男、石橋湛山、武谷三男をあげ、「思想は論じるものではなく、使うものである」という梅棹忠夫の言葉を紹介している。これは、「実験屋」を貫いた、宇井さんの生き方そのものだろう。だから、痛烈な東大批判、大学解体論にもつながったのだ。

9. 実験屋最後の仕事

宇井さんの技術政治学ともいえる視点の形成は、実験歴60年と自称

する、プラグマティストとしての資質にもよるだろうが、水俣病事件との遭遇がそれにかかわらないはずはない。宇井さんにとって、水俣病事件とは、思いもしなかったところから、突然、襲った衝撃だったのではないだろうか。思いもしなかったというのは、自分もまた、水俣病を引き起こすような科学技術の制度のなかにいたことを、水俣病事件によって気づかされたからである。技術は使い方次第では善くも悪しくなるという、一見、もっともらしい言説が、技術のイデオロギー性を隠蔽していることを直視して、技術のはらむ権力性に抗するのに、宇井さんが到達したのが、「やわらかい技術」だった（宇井 2005）。それは、文字どおり「土木」からなる技術、すなわち、自分たちの身の回りにある材料でつくりあげられる技術であって、そうであるからこそ、住民自身で操ることができ、必要に応じて組み立て直すことができる。そして、そのことがまた住民自治を強化することにつながるような技術である。

下水処理施設の実験をとおして、宇井さんが得た解答は、単一の機能に純化させて効率性を追求するのではなく、逆に、効率を下げることで、生物（活性汚泥）の働きにまかせる余地（曖昧さ）を確保し、システムの安定性を増すことだった。効率性の追求や政治権力への奉仕という、これまで技術者が果たしてきた役割の行き着く先が水俣病事件（チッソ技術者のみならず、東大工学部医学部（さらには法医学部経済学部）の犯罪であると宇井さんはとらえている）であるなら、効率を上げるのではなくて効率を下げること、農業の工業化ではなくて工業の農業化をすすめることが、水俣病と向き合った宇井さんの目指したところだった。それはまた、技術とはけっして普遍的なものではなく、地域や環境に応じて異なるものであり、沖縄の気候、生態系に適合した技術や技術のとらえ方があるはずだという発想に支えられていた。

宇井さんは、若い世代の人たちに対して、どんなに孤独であったとしても科学者はそれに耐えられなくてはいけないと言っていた。それは、独創的な仕事をする研究者としての姿勢を語っていたのであろうが、同時に、実験科学者としての矜持でもあり、助手として東大自主講座を主宰しとおしたご自身とチッソ水俣病院の医師、細川一博士の姿を重ね合わせてもいだらう。10年ひとつのことに取り組めばその専門家になれ

る、20年取り組めば一流になる、という宇井さんの言葉は、ぼくらに勇気をあたえた。

11月のある日、夜遅くに、藤林さんが電話をくれて、宇井さんのお見舞いにいったときの様子を知らせてくれた。その翌日、沖縄での日本地方自治学会の会場で、宮本憲一さんから宇井さんが亡くなれたことをお聞きした。であれば、藤林さんが電話をくれた頃は、と思わざるを得なかった。中村尚司さんが、宇井さんの功績のひとつに、「公害」を‘polluted Japan’と訳したことをあげている（中村 2006）。なるほどと思った。日本ボランティア学会の事務局から、宇井さんの特集を組むからと原稿を依頼され、書き出したものの、宇井さんについて語るよりも、自主講座に出会ってからの自分の軌跡についてが大半を占めてしまった。もとより、宇井純論を書けはしない。宇井さんと会ったのは、駒場自主講座と沖縄大学地域研究所である。どちらも宇井さんが始めたものだ。宇井さんについて書くことは、この2つの間で自分がした経験について書くことになった。水俣はもちろんだが、白保でも、宇井さんとは別の切り口で、その地の方々と深く接していただくことになった。得難い経験であった。何としてもその方々の恩に報いなければならない。1977年、宇井さんが「自主講座」をもって駒場にやってきた。それが始まりだった。

（やなか・しげる／鳥取大学地域学部）

追記

人名やその注が多く、読者には頻わしく思われるかもしれないが、当時の方々のこととなるべく固有名詞として記しておきたいと思う。それぞれのボランタリーな生き方のつながりのなかで、社会が生み出されていくことのイメージをお伝えできれば幸いである。

[注]

- 1) 現在、奈良女子大学、物理学。
- 2) 現在、フリーカメラマン。著書に『カヌードス・百年の記憶——ブラジル農民、土地と自由を求めて』(1997、現代企画室)がある。
- 3) 自主講座「大学論」が大学解体を論じていたこの時期、学内では、一方で、東京大学創立100周年記念事業が推進され、また一方で、東大闘争10年を問う動きがあった。
- 4) 東京都文京区の白山にも春日にも自主講座事務局の分室があった。春日には、青林舍から移った「東京・水俣病告発する会」の事務局が置かれた。トライ印刷ショップは言問通り東大農学部前で、『月刊「公害を逃がすな』を発行していた反核・パシフィックセンターの事務所があった（後年、宮内泰介さん（現在、北海道大学、環境社会学）が学生時代ここに出入りしていたという）。
- 5) 現在、フェリス女学院大学、平和学。
- 6) 社会学者。東大闘争をつうじての学問、教育についての思索は『大学—学問—教育論集』(1977、三一書房)に、また、自主講座「人間社会論」の実践は『デュルケームとウェーバー——社会科学の方法（上・下）』(1981、三一書房)にまとめられている。東大闘争の時期に自主講座を主宰し、その後、あらためて、市民とともに学ぶ場として1977年に自主講座を「再開」した。
- 7) 現在、東京大学、教育社会学。
- 8) 水俣病患者運動のリーダーであった川本輝夫さんが、加害企業のチッソ本社との交渉の際、チッソ職員に暴行したとして傷害罪で起訴され、一審（1975年）では有罪判決であったが、二審で、原判決破棄という公訴棄却（検察の職権乱用で訴えること自体が不当）の判決が下された（1980年、最高裁判決で公訴棄却が確定）。
- 9) 水俣病センター相思社 <http://www.soshisha.org/> 参照。
- 10) 写真家、映画監督。著書に『今日もせっせと生きている』(1981、風媒社)、『ぼくたちは生きているのだ』(2006、岩波書店)がある。
- 11) 詩人。写真家との共作に『呼吸する原っぱ』(芥川仁ノ写真、2004、世織書房)、『ぱんぱかぱん』(小林茂ノ写真、1985、径書房)がある。
- 12) 現在、環境監視研究所。
- 13) 当時、NHKアナウンサー。著書に『水俣病事件四十年』(1997、華書房)がある。
- 14) 土本典昭さんなどの映画を制作した記録映画プロダクション。当時、東京新橋に事務所があった。その仕事は、現在、シグロ（映画制作配給会社）に引き継がれている。<http://www.cine.co.jp/> 参照。
- 15) 写真家。桑原史成、塙田武史、W・ユージン・スマス&アイリーン・美緒子・スマス、小柴一良、田中史子、芥川仁と共に『写真集 水俣を見た7人の写真家たち』(2007、弦書房)。
- 16) 俳優。1970年の水俣巡礼の後、1972年に水俣に移り住み、百姓見習いとして水俣病患者との自給農園を営み、1980年から生類合祀の乙女塚建立のための全国勧進行脚を始める。その一人芝居『海よ母よ子どもらよ』・現代夢幻能『天の魚』（原作：石牟礼道子）は556回を数えた。著書に『祖さまの郷土 水俣から』(1975、講談社)、『海よ母よ子どもらよ』(1983、樹心社)がある。
- 17) 映画監督。当時、岩波映画製作所。作品に『越後上布』(1982)、『病院はきらいだ』(1991)など。
- 18) 演出家。
- 19) 現在、京都造形芸術大学、映画監督。代表作に『阿賀に生きる』(1992)がある。著書には『日常という名の鏡』(1996、凱風社)、『ドキュメンタリーの修辞学』(2006、み

- すず書房)がある。
- 20) 現在、小児科医。著書に『ゆっくり大きくなればいい——こども医者診療日記』(2001, 教育史料出版会)がある。
- 21) 岩瀬(1999)参照。
- 22) 現在、白百合女子大学、フランス文学。訳書に『フランスの遺言書』(アンドレイ・マキース, 2000, 水声社)、『人類学の周縁から』(ジェイムズ・クリフォード, 2004, 人文書院)、『斬首の光景』(ジュリア・クリステヴァ, 2005, みすず書房)がある。
- 23) 著書に『ただの主婦にできたこと』(1987, 現代書館)、『山田さんのひとりNGO——ニライカナイ・ユー通信』(2002, 現代書館)。
- 24) 写真家。現在、グリーン・アクション代表。http://www.greenaction-japan.org/参照。
- 25) フランスの海洋探検家・海洋学者。スキューバ(アクアラング)を開発する。クストー協会についてはhttp://www.cousteau.org/参照。
- 26) 現在、明治学院大学。著書に『埋立問題の焦点——志布志国家石油備蓄基地と漁業権』(1986, 緑風出版)、『持続的開発と生命系』(1995, 学陽書房)、『コモンズ行動学入門——早わかり入会権・漁業権・水利権』(2000, まな出版企画)がある。
- 27) 常寂光寺住職。著書に『カンカン坊主の清掃ゲリラ作戦』(1984, 樹心社(星雲社))。
- 28) 大地を守る会についてはhttp://www.daichi.or.jp/、ボラン広場についてはhttp://www.polanz.net/polanz.htmlを参照。なお、これらのグループのよびかけて、1988年に全国の市民活動の経験交流の船「ばななぼうと」が神戸を出航し、石垣島白保をはじめとして南の島々を訪ねた。藤田和芳『ダイコン1本からの革命』(2005, 工作舎)参照。
- 29) WWFジャパン(世界自然保護基金)は2000年4月、白保をWWFサンゴ礁保護研究センター「しらほサンゴ村」を開設している。http://www.wwf.or.jp/shiraho/参照。
- 30) 現在、長野にて農業。著書に『サンゴの海に生きる』(1990, 農山漁村文化協会)。
- 31) 現在、京都大学、生態学。著書に『日本の渚』(1999, 岩波書店)がある。
- 32) 海洋生物学者。著書に『モイヤー先生、三宅島で暮らす』(1993, どうぶつ社)など。
- 33) 詩人。『犬も歩けば』(2004, 野草社(新泉社))。
- 34) 沖縄で「公民館」というとき、多くの場合、社会教育上の公民館とは別の、自治会・町内会に該当する地域住民組織およびその集会所を指す。その区別を明瞭にするために、地域住民組織を「自治公民館」と称するときがある。
- 35) 『沖縄タイムス』1988.7.21朝刊。論壇「多彩なアセス意見書の内容」。
- 36) 現在、滋賀県知事。環境社会学。著書に『生活世界の環境学』(1995, 農山漁村文化協会)、『水辺ぐらしの環境学』(2001, 昭和堂)など。
- 37) 現在、早稲田大学、環境社会学。著書に『環境社会学の理論と実践』(1997, 有斐閣)、『環境社会学』(1999, 放送大学教育振興会)、『柳田民俗学のフィロソフィー』(2002, 東京大学出版会)など。
- 38) 映画監督。作品に『水俣——患者さんとその世界』(1971)、『医学としての水俣病』(1974)、『不知火海』(1975)など。著書には『映画は生きものの仕事である』(1974, 未来社)、『逆境の中の記録』(1976, 未来社)、『水俣映画遍歴』(1988, 新曜社)など。
- 39) 水俣病患者連合編『魚湧く海』(1998, 草書房)参照。
- 40) (株)旗野住研取締役専務、新潟水俣病安田患者の会事務局、阿賀に生きるファン俱楽部事務局、冥土のみやげ企画事務局など。「新潟水俣病聞き書き集『あがの岸辺にて』」「新日本文学」41(1986)。『焼いたサカナも泳ぎ出す』(1992, 記録社(影書房))も参照。
- 41) 『鶴見良行著作集』(全12巻, みすず書房)参照。
- 42) 民際学。著書に『地域自立の経済学』(1993=1998, 日本評論社)、『人びとのアジア』(1994, 岩波書店)など。「グローバル化とコミュニティ」『日本ボランティア学会2000年

- 度学会誌(ボランティア・コミュニティ)』(2001)参照。
- 43) 鶴見さんたちの「エビ研究会」は1988年7月27日~8月30日、木造船を借り切ってインドネシア多島海の島々を見て回った。鶴見良行『アラフラ海航海記』(1991, 徳間書店)、村井吉敬・鶴見良行編著『エビの向こうにアジアが見える』(1992, 学陽書房)参照。
- 44) 中村(1994)参照。
- 45) 現在、沖縄大学理事長。沖縄近現代史。著書に『沖縄同時代史』(全10巻, 凱風社)、『沖縄現代史』(2005, 岩波書店)など。
- 46) 現在、熊本学園大学、水俣学。
- 47) 民際学。著書に『実学民際学のすすめ』(2000, コモンズ)、『環境とつきあう50話』(2005, 岩波書店)。
- 48) 大阪学院大学、地域環境計画。千里リサイクルプラザ研究所主担研究員。
- 49) 環境社会学会初代会長。著書に『環境運動と被害者運動』(1993, 学文社)、『環境社会学のすすめ』(2003, 丸善)、『講座 環境社会学』(編著, 有斐閣)、『公害・防災・職業年表(新版)』(2007, すいれん舎)など。
- 50) 埼玉大学共生社会研究センター http://www.kyousei.iiron.saitama-u.ac.jp/参照。センター主催シンポジウム「市民と地域が作る『環境の世紀』における宇井さんの基調講演「歩いて考える——私の実践と経験から」参照。
- 51) 著書に『ODAをどう変えればいいのか』(長瀬理英と共に著, 2002, コモンズ)、『カツオとかつお節の同時代史』(宮内泰介と共に著, 2004, コモンズ)。
- 52) 1976年、ミニコミの収集・公開・保存を目的に設立され、2001年に閉館。『住民図書館25年のあゆみ』(2001)参照。
- 53) 現在、沖縄大学学長、環境学。
- 54) 沖縄大学、生態学。
- 55) 沖縄大学、社会人類学。著書に『沖縄からアジアが見える』(1999, 岩波書店)など。
- 56) 財團法人公害地域再生センターの愛称。あおぞら財團 http://www.aozora.or.jp/参照。『都市に自然をとりもどす』(宗田好史ほか編, 2004, 学芸出版社)参照。
- 57) 宇井さんによる自主講座についての記述(回想)は、宇井(1991, 2003)を参照。

[文献]

- 新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編, 2005・2006,『地域の自立 シマの力(上・下)』コモンズ.
岩瀬政夫, 1999,『水俣巡礼』現代書館.
宇井純, 1991,『公害自主講座15年』亞紀書房.
——, 2001,『実験屋最後の仕事』『けーし風』31.
——, 2003,『最終講義』『沖縄大学地域研究所年報』17.
——, 2005,『やわらかい技術の必要性』『地域の自立 シマの力(上)』コモンズ.
沖縄大学地域研究所, 2005,『特集『地域を知る—市民調査の可能性』自ら責任がもてる
地域をつくるための調査とは:トヨタ財団助成対象者報告フォーラム』『年報』19.
きだみのる, 1948,『気違い部落周游紀行』吾妻書房.
熊本一規, 1995,『持続的開発と生命系』学陽書房.
多辺田政弘, 1990,『コモンズの経済学』学陽書房.
鶴見俊輔, 2002,『読んだ本はどこへ行ったか』潮出版社.
鳥越皓之・嘉田由紀子編, 1984,『水と人の環境史』御茶の水書房.
鳥越皓之, 1997,『環境権と所有論』『環境社会学の理論と実践』有斐閣.
中村尚司, 1994,『人びとのアジア』岩波書店.
——, 2006,『最終講義 生老病死を問う』龍谷大学経済学会『経済学論集——民際学
特集』46(5).
宮本常一, 1960,『忘れられた日本人』未来社.
家中茂, 1996,『新石垣空港建設計画における地元の同意』日本村落研究学会編『年報村
落社会研究』第32集.
——, 2001,『石垣島白保のイノー』井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学』新曜
社.

日本ボランティア学会 2006年度学会誌

2007年7月発行

発行人 栗原彬
編集人 中村陽一
振替口座 00980-3-94307
印刷 サン美術印刷(株)



日本ボランティア学会

[事務局] 財団法人たんぽぽの家 内
〒630-8044 奈良県奈良市六条西3-25-4
Tel:0742-43-7055 Fax:0742-49-5501
E-mail:vgakkaipopo.or.jp

発行人の許可なく複製・転載を禁じます。
本誌は会員向けの学会誌ですが、ご希望の方には1,800円でお預けしています。